

桃太郎

芥川龍之介



むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃の木が一本あった。大きいとだけではない足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地の底の黄泉の国にさえ及んでいた。何でも天地開闢の頃おい、伊弉諾の尊は黄最津平阪に八つの雷を却けるため、桃の実を礫に打つたという、——その神代の桃の実はこの木の枝になつていたのである。

この木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一度実をつけていた。花は真紅の衣蓋に黄金の流蘇を垂らしたようである。実は——実もまた大きいのはいうを待たな

い。が、それよりも不思議なのはその実は核さねのあるところに美しい赤児あかごを一人ずつ、おのずから孕はらんでいたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は山谷やまたにを掩おおった枝に、

るるい

累々と実を綴つづったまま、

静かに日の光りに浴あびていた。一万

年に一度結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかしある

寂しい朝、運命は一羽の八咫鴉やたがらすになり、さつとその枝へおろ

して来た。と思うともう赤みのさした、小さい実を一つ啄つばみ

落した。実は雲霧くもぎりの立ち昇のぼる中に遥はるか下の谷川へ落ちた。谷

川は勿論もちろん峯々の間に白い水煙みずけぶりをなびかせながら、人間のいる

国へ流ながれていたのである。

この赤児あかごを孕はらんだ実は深い山の奥を離のちれた後、どうい

う人の手に拾ひろわれたか？——それはいまさら話すまでもあるまい。

谷川の末にはお婆おばあさんが一人、日本中にほんじゅうの子供の知しっている通

り、柴刈りに行ったお爺さんの着物か何かを洗っていたのである。……

二

桃から生れた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立った訣はなぜかという、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。その話を聞いた老人夫婦は内心この腕白ものに愛想をつかしていた時だったから、一刻も早く追い出したさに旗とか太刀とか陣羽織とか、出陣の支度に入用のものは云うなり次第に持たせることにした。のみならず途中の兵糧には、これも桃

太郎の註文通り、黍団子ちゆうもんさえこしらえてやったのである。

桃太郎は意気揚々と鬼が島征伐の途とに上のぼった。すると大き

い野良犬のらいぬが一匹、饑うえた眼を光らせながら、こう桃太郎へ声をかけた。

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございませす？」

「これは日本にっぽん一の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪あやしかったのである。けれども犬は黍団子と聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄った。

「一つ下さい。お伴ともしましょう。」

桃太郎は咄嗟とつさに算盤そろばんを取った。

「一つはやられぬ。半分やろう。」

犬はしばらく強情ツヨコウに、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃太郎は何といつても「半分やろう」を撤回てつかいしない。こうなればあらゆる商売のように、所詮しよせん持たぬものは持ったもの意志に服従するばかりである。犬もとうとう嘆息たんそくしながら、黍団子を半分貰う代りに、桃太郎の伴ともをすることになった。

桃太郎はその後のち犬のほかにも、やはり黍団子の半分を餌食えじきに、猿さるや雉きじを家来けらいにした。しかし彼等は残念ながら、あまり仲なかの好い間いがらではない。丈夫な牙きばを持った犬は意気地いきちのないう猿を莫迦ぼかにする。黍団子の勘定かんじように素早い猿はもつともらしい雉を莫迦ぼかにする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍にぶい犬を莫迦にする。——こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかつた。

その上猿は腹が張ると、たちまち不服を唱え出した。どうも黍団子の半分くらいでは、鬼が島征伐の伴をするのも考え物だといひ出したのである。すると犬は吠えたりしながら、いきなり猿を噛み殺そうとした。もし雉がとめなかつたとすれば、猿は蟹の仇打ちを待たず、この時もう死んでいたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道徳を教え、桃太郎の命に従えと云った。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかつた。その猿をとうとう得心させたのは確かに桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げたまま、日の丸の扇を使い使いわざと冷かにいい放した。

「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても宝物は一つも分けてやらないぞ。」

欲の深い猿は円い眼まるめをした。

「宝物？　へええ、鬼が島には宝物があるのですか？」

「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出うちでの小槌こづちという宝物さえある。」

「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せば、一度に何でも手にはいる訣わけですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行って下さい。」

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の途みちを急いだ。

三

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩

山ばかりだった訣わけではない。実は椰子やしの聳そびえたり、極樂鳥ごくらくちやうの囀せうすつたりする、美しい天然てんねんの樂土らくどだった。こういう樂土せに生せいを享うけた鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼というものは元来我々人間よりも享樂きやうらく的に出来上できあった種族らしい。瘤取こぶりの話に出て来る鬼は一晩中踊りを踊っている。一寸法師いっすんぼうしの話に出てくる鬼も一身の危険を顧みず、物詣ものもでの姫君に見とれていたらしい。なるほど大江山の酒顛童子おおいやま しゅてんどうじ らしようもん いばらぎどうじや羅生門らしようもんの茨木童子いばらぎどうじは稀代きだいの悪人のように思われている。しかし茨木童子などは我々の銀座を愛するようにすざくおおじ朱雀大路を愛する余り、時々そつと羅生門へ姿を露あらわしたのではないであろうか？ 酒顛童子も大江山の岩屋いわやに酒ばかり飲んでいたのは確かである。その女にょにん人を奪うばって行ったというの——真偽しんぎはしばらく問わない

「ルビの「いっすんぼうし」は底本では「いっすんぼうし」

にもしろ、女人自身のいう所に過ぎない。女人自身のいう所をことごとく真実と認めるのは、——わたしはこの二十年来、こういう疑問を抱いている。あの頼光らいこうや四天王してんのうはいずれも多少気違いじみた女性崇拜家すうはいかではなかったであろうか？

鬼は熱帯的風景の中に琴ことを弾ひいたり踊りおどりたり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩あんのんに暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も機はたを織はったり、酒を醸かもしたり、蘭らんの花束こしらを拵こしらえたり、我々人間の妻や娘と少しも変わらずに暮らしていた。殊にもう髪かみの白い、牙きばの脱ぬけた鬼の母はいつも孫まごの守もりをしながら、我々人間の恐ろしさを話して聞かせなどしていたものである。——

「お前たちも悪戯いたずらをすると、人間の島へやってしまうよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子しゅてんどうしのように、きつと殺

されてしまうのだからね。え、人間というものかい？ 人間というものは角つのの生はえない、生白なましろい顔や手足をした、何ともいわれず気味の悪いものだよ。おまけにまた人間なまりの女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面なまりに鉛の粉こをなすっているのだよ。それだけならばまだ好いいのだがね。男でも女でも同じように、謙うそはいうし、欲は深いし、焼餅やきもちは焼くし、己惚うぬぼれは強いし、仲間同志殺し合うし、火はつけるし、泥棒どろぼうはするし、手のつけようのない毛だものなのだよ……」

四

桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与え

た。鬼は金棒かなぼうを忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭々ていていと聳そびえた椰子やしの間を右往左往うおうざおうに逃げ惑まとった。

「進め！ 進め！ 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」

桃太郎は桃の旗はたを片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、犬猿雉いぬさるきじの三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の好いい家来けらいではなかつたかも知れない。が、饑うえた動物ほど、忠勇無双むそうの兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼等は皆ひとかあらしのように、逃げまわる鬼を追いまわした。犬はただ一噛ひとかみに鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭くちばしい嘴くちばしに鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我々人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺しめころす前に、必ず凌辱りようじよくほしいままを恣まにした。……

あらゆる罪悪の行われた後のち、とうとう鬼の酋長しゆうちゆうは、命をと

りとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参した。桃太郎の得意は思ふべしである。鬼が島はもう昨日のように、極楽鳥の囀る楽土ではない。椰子の林は至るところに鬼の死骸を撒き散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来を従えたまま、平蜘蛛のようになった鬼の酋長へ厳かにこういい渡した。

「では格別の憐愍により、貴様たちの命は赦してやる。その代りに鬼が島の宝物は一つも残らず献上するのだぞ。」

「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質のためにさし出すのだぞ。」
「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼ぶれいでも致したため、御征伐ごせいぼつを受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういふ無礼を致したのやら、とんと合点がてんが参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお明あかし下さる訣わけには参りませぬまいか？」

桃太郎は悠然ゆうぜんと頷うなずいた。

「日本にっぽんいち一いちの桃太郎は犬猿雉いんげいの三匹の忠義者を召し抱かかえた故、鬼が島へ征伐に來たのだ。」

「ではそのお三さんかたをお召し抱えなすつたのはどういふ訣わけでございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子きびだんごをやつても召し抱えたのだ。——どうだ？ これでもまだわか

² ルビの「にっぽんいち」は底本では「にっぽんいち」

らないといえ、貴様たちも皆殺してしまふぞ。」
 鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後へ飛び下ると、いよ
 いよまた丁寧にお時儀をした。

五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供
 に宝物の車を引かせながら、得々と故郷へ凱旋した。——こ
 れだけはもう日本中の子供のとうに知っている話である。し
 かし桃太郎は必ずしも幸福に一生を送った訣ではない。鬼の
 子供は一人前になると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼
 が島へ逐電した。のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々海

を渡つて来ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとした。何でも猿の殺されたのは人違いだったらしいという噂である。桃太郎はこういう重ね重ねの不幸に嘆息を洩らさずにはいられなかった。

「どうも鬼というものの執念の深いには困つたものだ。」
 「やつと命を助けて頂いた御主人の大恩さえ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます。」

犬も桃太郎の没面を見ると、口惜しそうにいつも唸つたものである。

その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明りを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子の実に爆弾を仕こんでいた。優しい鬼の娘たちに恋をするこ
 とさえ忘れたのか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目

の玉を赫かがやかせながら。……

六

人間の知らない山の奥に雲霧くもぎりを破った桃の木は今日こんにちもなお昔のように、累々るるいと無数の実みをつけている。勿論桃太郎を孕はらんでいた実だけはとうに谷川を流れ去ってしまった。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。あの大きい八咫鴉やたがらすは今度はいつこの木の梢こすえへもう一度姿を露あらわすであろう？ ああ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。……

(大正十三年六月)

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 2 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 4 月 10 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

初出：「サンデー毎日 夏期特別号」

1924（大正 13）年 7 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 8 日公開

2012 年 9 月 21 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。